

馬探 2025 ～地域の馬の歴史・文化探究コンテスト～《中・高校生、学生限定》

形式:エッセイ

文字数:2669文字

作者名:福田 美香子(ふくだ みかこ)

タイトル:白馬にキスを ―八王子に息づく馬の記憶―

私は東京都の土地の一つ、八王子市に住んでいる。八王子市と言えば、はっきりとした特徴が一つだけある。“大学が多い”という点だ。私もまた、その一つの大学に通う学生である。

ただ、私の通う大学には馬術部はない。これといった馬との関係性のある大学でもないし、これまで生きてきた二十数年、特別に馬と関わってきた経験もない。

それでも、私は馬が好きだ。

私が幼少期を過ごした宮崎県では、馬の放牧が有名である。特に都井岬は、海に面した丘陵地で、草原を自由に歩く御崎馬の姿が名物だ。青々とした草にひだまりが落ち、そこでのんびりとくつろぐ馬たちの姿は、とても心が和む光景だ。けれど、私がその光景を見たのはたった一度きり。車の窓から通りすがりに見かけたただけだったが、夕暮れどきに照らされた焦茶色の立髪が海風に揺れる姿を「綺麗だな」と、そうはっきり思ったことは今でも鮮明に覚えている。野生に近いその美しい姿から、「馬」という存在に心を掴まれた瞬間だった。

それから十年以上経った今でも、私は動物が好きで、特に馬を見ると胸が高鳴る。東京に出てきてからは、住むことになる八王子市が“大学の街”と呼ばれるほど大学があることや、そのいくつかの大学には馬術部があることを知り、嬉しくなった。私の持病の問題で乗馬はおろかスポーツの類はやってこなかったし、何より他大学だから関わることなどないと分かっていたけれど、イベントなどを一度は絶対に見に行ってみようと考えていた。だから、私の大学近くに「八王子乗馬倶楽部」があると知ったときは、とても嬉しかったものだ。登下校の途中に立ち寄れるため、練習風景を眺めるのが密かな楽しみになっていた。

また、趣味の読書がこうじて、図書館を利用しに他大学へ行くことも多く、その道すがら馬術部の練習を遠くから見かけることもあった。特に、障害を倒して落ち込む馬を見て、騎手だろう人が慌てて人参を持ってきて「大丈夫、大丈夫。これ食べて休憩したら、また頑張ろ？」と苦笑いで慰めていた光景を覚えている。馬はまるでその人の言葉を分かっているみたいに人参を受け取ると、咀嚼しながらも黒く大きな瞳を瞬かせて、甘えるようにその人の方に首を巻きつけていた。その人は笑って、わしゃわしゃと慣れた手つきで馬の立髪を撫でる。まるで年下の兄弟でも甘やかすような様子は、人も馬も可愛くて仕方なかった。

私はそれまで、馬術とは人間が馬を“支配する”競技だと思っていた。しかし実際はそうではなく、そこには信頼と対話があった。最初に惹かれたのは自然の中の馬だったが、人と共にある馬もまた、違う美しさを持っていた。自然の中の馬も美しいが、人とともに学び、支え合う馬もまた美しい。そう感じられたのは、あの日が初めてだった。

それでも当時の私は、「八王子と馬」に特別なつながりがあるとは思っていなかった。八王子は大学の街で、東京郊外のベッドタウンという印象しかなかったのだ。一言で言えば、田舎なだけだ。

そんな考えが変わったのは、ゼミの教授との何気ない会話がきっかけだった。教授は登山が趣味で、よく高尾山にも登っている。ある日、教授が授業中、雑学ついでに「高尾山から陣馬山まで歩く“奥高尾縦走路”って知ってる？」と話を切り出した。陣馬山の山頂には“白馬の像”が立っているという。それは長年にわたって酸性雨や自然の影響で多少汚れているらしいが、意外に綺麗にされてもいて、ちょっと変わった像らしい。山頂に登り切ったあと、達成感に包まれる中で見上げる白馬は先生のお気に入りらしく、「いつか登って見に行ったらいい」と山好きの先生は少し自慢げだった。

その白馬像は調べてみると、1960年代後半に京王電鉄が観光促進のために設置したものらしい。山の名前である陣馬山にあやかっただけのことだという。そんな陣馬山の由来も特に馬に関係するものではないのだが、教授は「八王子には陣馬山や白馬像があるし、意外と“馬の街”なのかもしれない」と笑っていた。その言葉に、私はふと興味を持った。もしかしたら、八王子と馬にはもっと深い歴史があるのではないか。

それから、もっと突っ込んで調べてみたら思いがけない発見があった。かつて八王子には「八王子競馬場」なるものがあったのだそうだ。1927年に設立された「多摩八王子競馬会」が運営し、地元農家の馬が出走する草競馬が盛んに行われていたという。東京や横浜からも多くの人が集まり、賑わっていたらしい。

戦争の影響で昭和20年代に閉場してしまったが、その跡地は今も日野キャンパス（東京都立大学）の周辺に残っている。私は以前、その大学の図書館に行ったことがあり、そのときに通った道がまさに「八王子競馬場跡地」だったとこのとき知って、Googleマップを片手にとても驚いた。何気なく歩いていた道が、かつて人と馬が走り、絆を育んだ場所だったのだと思うと、胸の奥がなんだか少し熱くなった。

競馬と聞くと華やかなイメージやギャンブルの印象が先に浮かんでいたが、もとは人と馬が支え合い、働く馬たちが力を競い合う“生活の延長線上の文化”だったのだと気づかされた。何より、八王子が農耕地だったからこそ、田舎だったからこそ、馬が身近にいたために自然に起こっていった草競馬が、人々の人気によって八王子競馬場にまでなったのだ。八王子競馬場は現在の大井競馬場の前身にもなっている。八王子と馬の絆は、今もどこかで繋がっているのだ。

大学で経済学部にも所属する私は、現在も人より地域の発展や産業の歴史を学ぶ機会が多い。その中で牛や、特に馬が人の労働や交通の要として、どれほど重要だったかを知るたびに、馬という存在の偉大さを思う。人は馬と共に生き、土地を耕し、街を広げ、戦を越えてきた。馬は人の文明の道標だったのだ。

今回、八王子の街に息づく“馬の記憶”をたどる中で、自分が立っているこの土地にも確かに馬が生きた時間があったのだと知り、少し誇らしい気持ちになった。

これからも私はきっと、八王子の街を歩くたびに、どこかで馬の姿を探してしまうだろう。たとえビルの立ち並ぶ街角でも、かつてここを駆け抜けた蹄の音を思い浮かべるだけで、風がやさしく感じられる気がするからだ。

そして今、私は心に決めている。大学を卒業するまでに、陣馬山へ登ってみようと。青空の下、山頂に立つ白馬の像をこの目で見てみたい。そのとききっと、私はまた笑って思うだろう。やっぱり、馬ってカッコいいな、と。

白馬の鼻に、口づけでもしようかな。